小學讀本

四

特34
971

小學校教科用書

小學讀本

文部省總務局圖書課

小學讀本卷之四

目次

第一課　商人は正直なるを貴ぶ
第二課　佐野屋長四郎の話
第三課　商人
第四課　帳面
第五課　尺秤桝
第六課　心の天秤

文部省

小學校教科用書

小學讀本

文部省總務局圖書課

小學讀本卷之四

目次

第一課　商人は正直なるを貴ぶ
第二課　佐野屋長四郎の話
第三課　商人
第四課　帳面
第五課　尺秤桝
第六課　心の天秤

第七課　吳服　太物
第八課　堀越安平の話
第九課　家財手道具を作る人と賣る人
第十課　小間物屋
第十一課　荒物屋
第十二課　桶屋と武士との話
第十三課　塗物
第十四課　燒物
第十五課　疊屋久藏靑磁發明の話
第十六課　石類
第十七課　金物
第十八課　材木
第十九課　關根矢作山林に熱心なり〜話
第二十課　穀屋　乾物屋
第二十一課　靑物屋
第二十二課　大作の勇氣　一

第二十三課　大作の勇氣　二
第二十四課　肴類　一
第二十五課　肴類　二
第二十六課　漁業
第二十七課　伊豫國綱代浦開き初めの話
第二十八課　鳥獸
第二十九課　飲食店
第三十課　皮師

第三十一課　旅
第三十二課　獵人の娘
第三十三課　舟
第三十四課　智仁勇の水夫　一
第三十五課　智仁勇の水夫　二
第三十六課　警察

文部省

小學讀本卷之四

第一課　商人は正直なるを貴ぶ

○相場　○活計　○利益　○一向

凡そ何品によらず、時により、處により、價の低きと、高きとあり、これを相場といふ。商人は、此相場をかんがへ、損と益とを計りて、品物を賣り買ひ〳〵、其間に利益を得て、活計を立つるものなり。去かし

東京帝國大學圖書之印

活　計　最

ながら一向、利益のみを計るときは、自ら人の信用を失ふことあるに至るべし。　すべて商人たるものゝ、最も大切にすべきは、人の信用にして、もし一たび之を失ふときは、いかに利益を得んとするも、かへりて大損を生ずるにいたるべし。　つゝしまざるべけんや。

作文　○話の書取

第二課　佐野屋長四郎の話

○なにがし

此作文課ハ、教師、短クカ分リ易キ話ヲ爲シ、生徒ヲシテ聞キ了リテ後、他ニ轉話スル心持ニテ筆記セシム。

佐　反　明　旅　宿　客　繁

○反物　○旅宿　○次第　○繁昌

昔、下野國宇都宮に、佐野屋長四郎といへる人ありけり。　ある日、東京村松町に住める伊勢屋なにがし來りて、多くの反物を仕入れけるが、明くる日になり、其反物は、下品なるを、あやまりて、上品の價を記したりきたるに心付き、大に驚きて、急ぎ伊勢屋が旅宿へ、其由を言ひやりぬ。　やがて、伊勢屋は來りて、我も商人なり、何とて其品の善し惡しを見別

け得ぬことの有るべき。　そは、けつ〜てあやまりには有るまじといふ。　佐野屋は、ひたすらにわびて、いや〜實もつてあやまれるなり。　是れが、上品の方なれば、いざ引きかへ申さんとて、出〜ければ、伊勢屋は、大に感心し、なほ多くの反物を仕入れ

て歸りたり。　さて、佐野屋は、右の如く、萬事正直に客を取り扱ひ、其上、品物を選び、價を安くせ〜かば、商賣、次第に繁昌し、初めは、せまき家に住ひ〜が、後には、大なる店を構へ、男女百十餘人をめ〜使ふほどになりて、其子孫、今になほ富み榮えて、其地にありといへり。

作文　○佐野屋ニ代リテ、伊勢屋ニイヒヤルコトバ。〔之ヲ手紙ニスベシ〕

サクジツ　ハ、オイデ、イロ〜オカヒアゲ　クダサレ、アリガタ

ウゾンジマス。シカルニ、ミギノシナハ、下品ノトコロ、マチガヘマシテ、上品ノ價ヲマウシアゲマシタリヲ、タヾイマコヽロヅキマシタ。ヨリテ、直クニオヒキカヘマウシアゲタクゾンジマスユヱ、イソギオイデヲヲガヒマス。

イセヤサマ　サノヤミセ

第三課　商人

○種類　○問屋　○仲買　○多少
○口錢　○乾物　○味噌　○醤油　○烟草
○菓子　○呉服　○太物　○材木

中　卸　捌　乾　噌　呉　服　社

商人には、樣々の種類あれど、先づ大凡問屋、仲買、小賣の三つに分かる。すなはち、問屋は、品物を大口に買ひ入れ、大口に賣出すものにして、其大口に賣り出すを、卸賣といへり。小賣商は、問屋、又は仲買人より、大口に買ひ入れて、之を多少にかゝはらず、客に賣り捌くものにして、店にて商ふものと、出歩きて賣るものとあり。仲買人は、賣る人と買ふ人との間に立ち、口錢を取りて、品物を取り次ぐ

ものなり。　其内、農工等より、品物を買ひあつめ、これを問屋へ卸すものと、問屋より買ひ取りて、小賣商に卸すものとあり。　又、其業は、いづれも、取り扱ふ品物によりて、かはれり。　今其品物の重なるものをいはゞ、穀類、乾物、青物、魚類、肉類、鹽、味噌、醤油、酒、茶、烟草、菓子、砂糖、紙、蠟燭、炭、薪、麻、綿、糸物、荒物、小間物、金物、燒物、塗物、呉服、太物、藥種、材木等なり。

帳面　例　貸

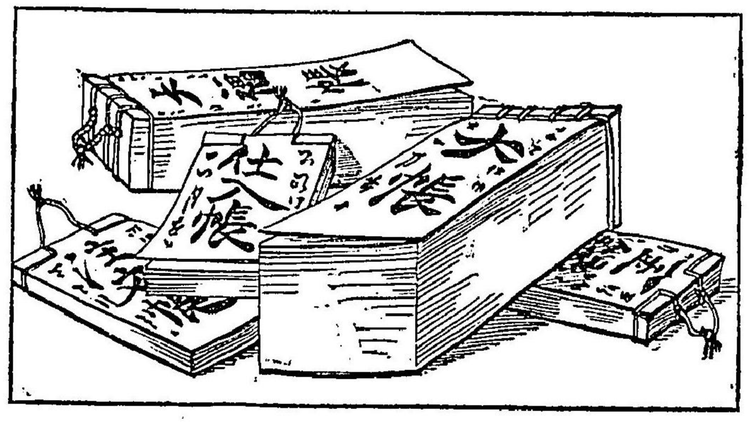
作文　○紙

第四課　帳面

○商業　○取引　○通例　○日記
○當座　○仕切　○勘定　○實地
○記簿法

商業は、もとより、何業、何職によらず、いさゝかにても、品物の取引き、金錢の出入あるものに、最も大切なるは、帳面なり。　帳面は、其家業により、入用の種類も、いろ〳〵かはれども、其通例なるは、大帳、

日記帳、金錢出入帳にして、大帳は、貸借の元帳をいひ、日記帳は、日々當座の覺を書き留めたくものをいひ、金錢出入帳は、金錢の出入を附けたき、差引勘定するものをいふ。此外仕入帳、仕切帳、注文帳等、種々ありといへども、皆實地に付きて心得べし。たゞし、帳面を正しく附くる事



は、たやすからぬものにて、其仕方を記簿法といふ。故に、帳附けは、記簿法をよく學ばざれば、能はざるものなり。

作文　○春のころ、米相場を問ひ合せにやる文

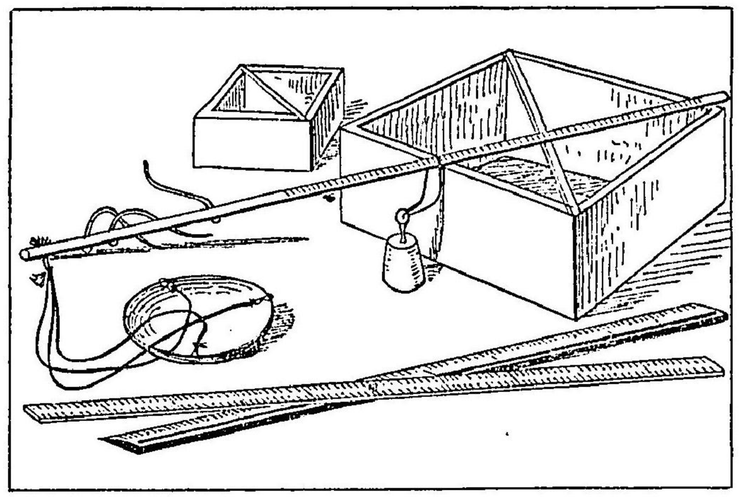
第五課　尺秤桝

○天秤　○秤　○釐等　○大量　○貫目　○輕重　○曲尺　○鯨尺

凡そ、賣買する品物には、尺にて、其長短をはかるべき物あり。秤にて、其輕重をはかるべき物あり。

升　勺　匁　貫　斤　斗

又、桝にて、其多少をはかるべきものあり。　而して其尺には、曲尺、鯨尺等ありて、ともに、毛、厘、分、寸、尺、丈、間などの目あり。秤には、天秤、釐等、大量等あり。て、これに、毛、厘、匁、貫目、斤などの目あり。　又、桝には、一合、桝、一升桝、一斗桝等ありて、これに勺、合、升、斗、石



慾　夢　擔　笊

などの目あり。

作文　○天秤

第六課　心の天秤

○水面　○公平　○西瓜　○擔ひ笊　○兩方

或處に、慾ふかき小兒ありて、常に、善き物あれば、我獨これを得んと思ひ、うまきものを見れば、我獨これをくはんと思へり。　ある夜、一つの夢を見たり、其夢は、一人の友と打ち連れて、或る川

片　兩　快　公

ばたを歩きゝに、あなたより、擔ひ笊に、西瓜を入れて、持ちたる、大なる男來れり。其男、二人に向ひて、此西瓜を、汝等に與ふべゝといふ。慾ふかき小兒、直に兩手を出して、我れにのみくれよといへり。其男、よゝ。　さりながら、唯は取らすまじ。　先づ、是れに乘るべゝとて、二人をとらへて、兩方の笊に載すれば、ふゝぎや、笊は見るゝ、大きなる天秤の皿となりて、水面近く平らにつるされたり。　さて、

大かる男の云ふ樣、かくてもなほ、汝一人に、此西瓜を取らすべきかと問へり。　其小兒、ゑばゝかんがへけるが、忽ち悟りて、何とぞ我と我友とに、片れちせぬ樣に、分ちてたまはれといふかと思へば、夢さめたり。　これより、此小兒は、心をあらため、物を得んと思ふ時は、必ず、心の中に、其天秤を思ひ出し、我身を片方の皿にれき、片方に、他人をれきてかんがへければ、後には、何事も、公平なる小兒なりと、人

に賞めらるゝ樣になりしとぞ。

作文　○夏の頃、大豆の相場を知らする文

第七課　吳服、太物

○金襴　○天鵞絨　○羅紗　○龍紋　○羽二重　○差別

錦　綾　絽　紗　紬　龍　紋　晒

すべて、衣服などにする織物を分ちて、吳服類、太物類とかす。吳服類は、金襴、錦、緞子、綾、繻子、綸子、七子、天鵞絨、羅紗、フランネル、紹、紗、縮緬、龍紋、絹、紬、羽二重、糸織、博多織、八丈縞、海氣などの絹糸、毛糸の類にて織れるものをいひ、太物類は、木綿、晒、布、縮、小倉、雲齋、絞羽、唐桟、金巾、更紗などの、木綿糸、麻糸の類にて、織りたるものをいひ、是れらの品を商ふものを、吳服屋、太物屋といへり。吳服、太物の差別なく、一度衣服として着古したるを、古着、又は古手といひ、これを商ふものを、古着屋といふ。

さて、右の織物類の中、羅紗、金巾の如きは、外國より來れるものなり。内國にて、名あるものは、近江

の長濱縮緬、豐前の博多織、陸中の南部紬、甲斐の海氣、下野の足利絹等にして、金襴、錦、繻子、緞子、羽二重等の織物は、西京を以て第一等となす。

作文　○話の書取

第八課　堀越安平の話

○船來　○古着　○端切
○儉約　○折柄　○外國　○交易　○平生
○極意

堀越安平は、東京にて名高き船來織物商なり。もーとは、上野國群馬郡の人なるが、若き頃、故ありて、東京に出でたれど、別に藝なき身の、何とてすべき樣ーなく、少ーばかりの古着、端切などを、竹馬といふもーのにつるーて、賣り歩きけーり。　かくて、儉約と勉強とを以て、次第に仕出し、

通旅籠町にて、盛に呉服太物の問屋を業とするに至る。　折柄、外國との交易初まりければ、人より先きに、横濱に店を出し、忽きりに、舶來織物の取引を爲し、つひに東京にも指を折らるゝ程の身代を作りて、之を子孫に遺すに至れり。　此人、常々其子どもに言ひ聞かせし樣、我は、平生、人を欺かぬを以て、商業の極意とせり。　故に、時としては、危き目にも逢ひたれども、皆此欺かぬ處にて免れたり。　又、商業は、出來、不出來多きものなれば、他人の金を頼みにするは、一層危きをかさぬるものなり。　故に、獨り立ちの商業こそ、我子孫には、願はしけれといひしとぞ。

作文　○秋の頃、味噌の大豆、鹽、麹の割合を問合する文
　　○同じ返事

第九課　家財手道具を作る人と賣る人

○塗師屋　○挽物師　○蒔繪師　○明荷屋

財　絵　笠　靴　飾　履　櫛

○筆結　○目鏡師　○時計師

一家、又は一人の使用する道具は、種々ありて、中には、木や竹を以て作れるあり、石、土、金の類にて製せるあり、皮、麻、紙の類より成れるもあり、これを製作する工人と、賣買する商人とあり。今其大略をいはゞ、指物師、鍛冶屋、鑄物師、銅師、ブリキ屋、桶屋、塗師屋、挽物師、蒔繪師、燒物師、硝子吹、表具師、提燈張、明荷屋、籠組、竹細工師、傘張、笠縫、桐油屋、

鏡

下駄屋、靴師、革師、筆結、墨師、硯師、玉屋、飾屋、鼈甲屋、烟管張、扇折、團扇張、櫛挽、目鏡師、鏡造、針師、ぴも打師、時計師、其他、なほ種々ありと雖も、こと〻くつくすにたへず。又、それらの工人の作れる物を、取り集めて、賣る商人は、金物屋、燒物屋、塗物屋、荒物屋、小間物屋なり。

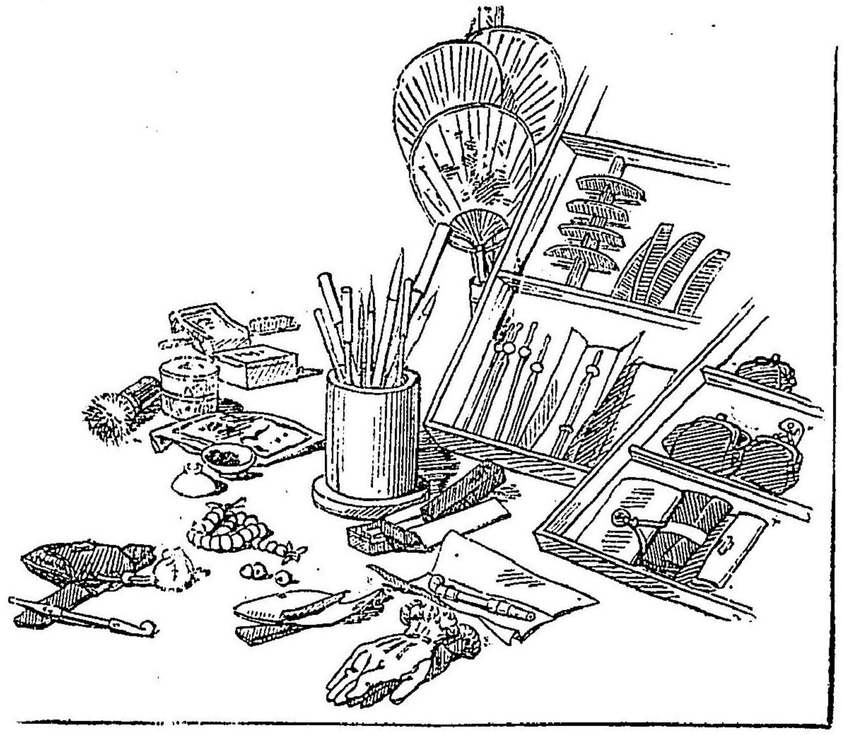
作文　○話の書取り

第十課　小間物屋

○巾着　○根付　○楊枝　○白粉

略　紐　帶　箒　楊　齒　磨　洋

小間物屋は、專ら、人の手道具類を商ふもの にて、其品々の大略をいはゞ、紙入、烟草入、巾着、烟管、烟管差、打紐、ぼたん、櫛、簪、笄、玉類、小金物類、根付、楊枝、齒磨、紅、白粉、筆、墨、針、



鋏、小刀、尺、扇、團扇、帽子、靴下、手袋等なり。其中、舶來の物品のみを商ふ店を、西洋小間物店、又は舶來小間物屋といへり。

作文　○冬の頃、味噌の作り方を問はれし時の返事

第十一課　荒物屋

○勝手　○杓子　○行燈　○行李

荒物屋は、家財の中、多くは、勝手道具につく可き、品を賣るものなり。其品々は、手桶、盥、榾、釣瓶、飯櫃等、其他の桶類、米揚笊、味噌漉笊、鹽笊、擔笊など

箸　吹　箒　簑　棒

の笊類、米櫃、戸棚、肴板（ナイタ）、擂木（スリコギ）、柄杓（ヒシャク）、杓子、箸（ハシ）、さゝら、消つぼ、火吹竹、炭取、塵取、井戸車、井戸繩、其他の繩類、箕類、篩類、箒類、籠類、御座、筵の類、行燈、手燭の類、行李、明荷、笠、傘、簑、草履、草鞋の類、天秤棒、六尺棒、鋤柄、鍬柄、其外なほ種々あるべし。

作文　○竹

第十二課　桶屋と武士との話

○亂世　○軍兵　○行列　○兩側　○見物　○無禮　○落武者

穩　軍　戰　兵　列　血　武　士

今の世は、此の如くめでたく治りて、穩かなれど、昔は、亂世とて、こゝにも軍、かしこにも戰と、いとさわがしき時ありき。　其頃、一組の軍兵、勇ましく、行列を立てゝ、或處を通りければ、其道の兩側なる家々は、皆職を止めて、之を見物せり。　さかるに、一人の桶屋のみ、見向もせず、長き井戸側のたがを掛け居りしが、其軍兵の長とも見ゆる武士、見付けて、無禮なりとて、さかり付けゝれば、其桶屋は、よぎな

く下に居たり。　さて、其桶屋は、明くる日も、夕方まで、井戸側を拵へ居たるに、血に染まりたる一人の武士、走り來りて、今てきに追ひせまられ、きはめて危し、何とぞ、かくまひくれよといふ。　其面を見れば、かの我をゑかり付け〜武士なれど、よ〜といひて、直に其高き井戸側を傾けて、其内に入れ、其まま、たがをかけて居たり。　折柄、あまたの武士かけ來りて、落武者は、見えざり〜かと問ひけれど、知らぬよ〜に答へたれば、皆々は、なほも彼方へ追ひゆきぬ。　最早、夜に入りければ、かの武士を出〜て、早く逃げよといへば、かの武士、大に喜び、兩手を地に着けて、此恩は、忘れず報ゆべ〜といひて、厚く禮を述べたり。　これを聞きて、桶屋のいふやう、我は、我が業を妨げず〜て、人を助くることを得ば、幾人も助く可ければ、別に報いを欲せず、唯此後、自分の爲になり〜と思ふ時にのみ、人を敬ふことを止め

られなば、うれにて十分なりといひ〜とぞ。

作文　○寒き頃、人の荒物店を開きたるを祝ふ文

第十三課　塗物

○漆器　○辨當　○文庫　○青漆
○最上　○蠟塗　○名産

塗物は、又漆器ともいひ、きぢものとて、白木の器物に漆〜たるものかり。　卽ち膳、椀、重箱、辨當箱、硯蓋、盆、書棚、硯箱、文庫、種々なる手箱等、是なり。

而〜て、之を塗るは、塗師屋の職に〜て、其塗りに種

辨　蓋　棚　庫　朱　込　界　眼

種あり。　其重なるものは、黑塗、朱塗、青漆、春慶（シヨンケイ）等に〜て、黑塗の上等を蠟塗といへり。　今其最上の塗方をいはゞ、先づ其きぢに、麻布を着せ、其上に、幾度か、地塗をな〜、其度毎に砥石や炭にて、すりては磨き、乾か〜てはまた磨き、後上塗をな〜、其上を又能く磨き揚ぐるなり。　此の如く塗りたる上に、金粉にて、樣々の模樣、繪などを畫くを、蒔繪といひ、又青貝などを塗り込めて、繪や、模樣を出〜たるを、

螺鈿といへり。　我國の漆器は、世界に並び無き名産にして、中にも、蒔繪、螺鈿の美なるは、外國人の眼をおどろかすところなり。　其品は、全國諸所より出すといへども、最も有名なるは、能登の輪島塗、羽後の野代塗等なり。　又蒔繪、螺鈿の類は、東京を以て第一となす。

作文　○漆

第十四課　燒物

○土瓶　○急須　○花瓶　○陶器　○磁器　○上藥　○青磁

陶　磁　瓶　粘　煤　甽　透

燒物は、皿、鉢、茶碗、土瓶、急須、德利、盃、花瓶、かめ類などにして、其中、陶器と、磁器との別あり。　陶器は、粘土を以て作るものにて、其質、粗にして、其色、煤色なるが多し。　近江の信樂燒、尾張の常滑燒、備前燒、伊勢の万古燒等これなり。　磁器は、糯米土といへる土を以てつくれるものにて、陶器に比ぶれば、質細かにして、透きとほる樣なるをいふ。　磁器は、

白色を常とすれども、間、其色の青きあり、之を青磁といふ。　磁器の名高きは、肥前の有田燒、唐津燒、尾張の瀬戸燒等なり。　さて、磁器を製するには、先づ糯米土に、燧石かどを粉にして交ぜ合せ、よく煉りて、丸きものからゞ、旋盤の上に置き、回しながら、好みの形

に造り、素燒竈に入れて燒く、之を素燒といふ。　此素燒を取り出し、樣々の繪、又ハ模樣を畫き、其上に上藥をかけて、再び本竈に入れて燒けば、美くしき磁器となるなり。

作文　○開店を祝はれし時の返事

第十五課　疊屋久藏青磁發明の話　○惣兵衛

○磁藥　○面白

昔攝津の三田といふ所にて、神田惣兵衛といへる

人の、初めて燒物の業を起し〳〵頃、疊屋久藏とて、歳十三ばかりなるが、雇はれて、日々、其燒物場に通へるものありき。　或日、途中にて、砥石のかけのあまた有りける中に、磁藥となるべしと思はるゝ一つの石を見出したり。

久藏ハ、よろこびて、之を主人惣兵衛に見せ、一たび試みんことを請へり。　惣兵衛は、面白きことに思ひ、直にゆるしければ、久藏は、其石を碎き、磁藥として、塗りて燒きて見しに、按に違はず、白き色に青みのかゝりたる磁器となれり。　久藏、大に喜び、幾度となく、塗り試みしに、いよ〳〵、青みをまさゝこのば、それより、かほ種々に工夫をこらし、つひに十分なる青磁を作り出だしことを得て、三田青磁の名、高く

四方に聞ゆるに至れり。かく、其業に大功有り〜故、其地よりハ、毎年山祭の日に、久藏が、石を取りて、主人に見する圖をのけ、之を祭るといへり。

作文　○話の書取

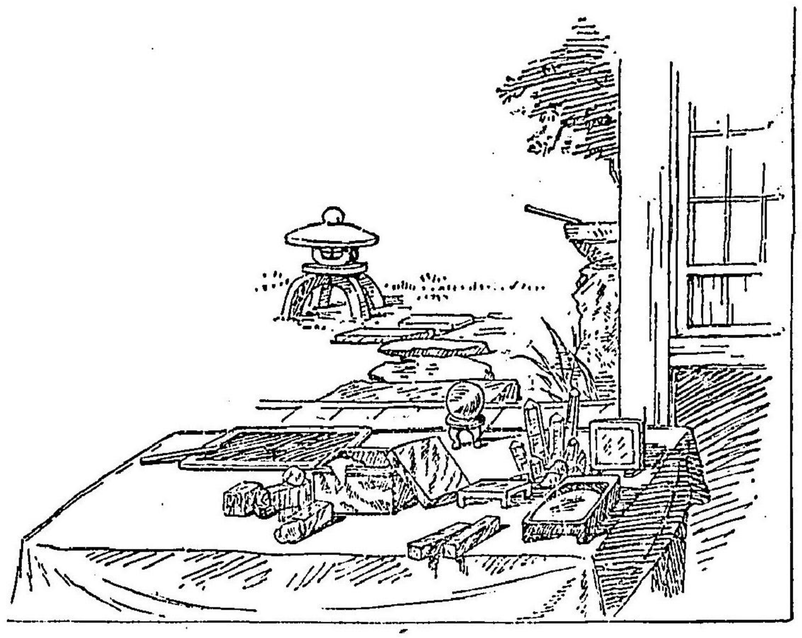
第十六課　石類

○水晶　○石印　○蠟石　○寒水石　○御影石　○石盤　○要用　○手水鉢

石に、種々かる品あり。磨きて玉とすべきあり、瑪瑙、水晶、紫水晶等これなり。此類の出づるハ、尾張、

墓碑　影刃　研要

美濃、甲斐なり。刻みて、石印、肉池、石筆など、樣々なる形の物となるべきあり、蠟石、大理石是かり。蠟石は、日光蠟石、大理石は、常陸の寒水石、世に知らる。切りて、石橋をかけ、家、倉を建て、石燈籠、手水鉢、墓碑、敷石、竈等を



作るべきあり、御影石是なり。　攝津の御影石、山城の白川石、有名なり。　鑿りて硯となし、へぎて石盤とすべきあり、石盤石是なり。　長門の赤間石、甲斐の雨畑石を最上となす。　又刃物を研ぎ、物を磨くべきものあり、荒砥、合せ砥、白砥、青砥の如き砥石是なり。　三河の名倉砥、丹波の佐伯砥、其名高し。又打ちて火を取り、碎きて硝子、磁器等を作るに用ふべきあり、燧石是なり。　其他、丸石、砂利の如き、礎となし、地に敷くに要用なるものあり。

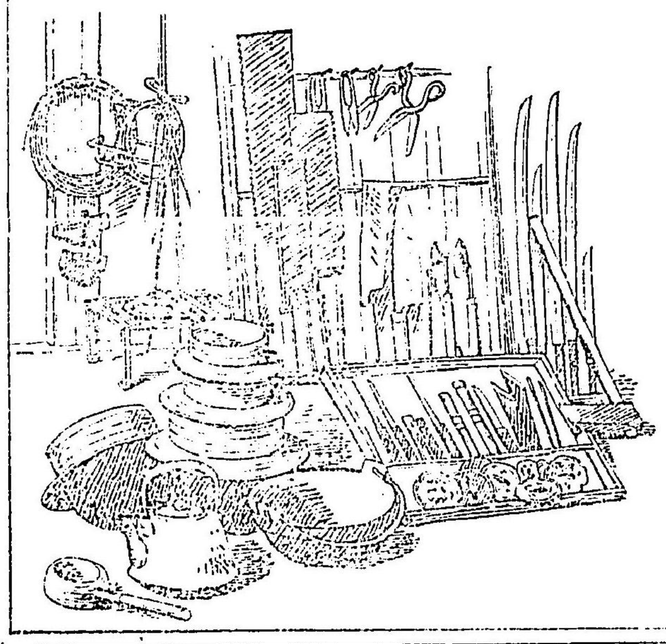
作文　○暖なる頃人の新宅に移るを祝ふ文

第十七課　金物

○錠前　○座敷　○飾付　○象眼

金物類は、刀劍、小刀、斧、ぶ、鋸、鉋、鑿、鑪、錐、庖丁、鋤、鍬、鎌、鋏、剃刀等の刃物、鍋、釜、鐵瓶、藥罐、銅壺、火鉢、火箸、五徳、十能、火熨斗、鐵槌、鐵砲、鐵てこ、稲扱、熊手、鏝、錠前等、其他の器物、金具類、線金類、金網類、釘類等なり。　右の品々の内には、鍛冶屋の打ち鍛

ひたるものあり、銅師の打ち延べ作れるものあり、鑄物師の鑄出したるものあるなり。手道具又ハ座敷かどの飾付に用ふるものの中には、間、銀、銅、鐵かどに模樣、繪かどを彫りつけ、それに種々なる、金類をはめこみたるものあり、之



を象眼といひ、又金銀をつけたるものあり、之を滅金といふ。象眼細工は、象眼師、或ハ飾屋の職とするところにて、是亦我國の名産なり。又刀劍の類も、我國のものは、其鍛ひ方、万國に並ぶものなしといへり。

作文　○鍋釜を鑄る仕方

第十八課　材木　○造作　樹木　○銀杏　○黄楊　○胡桃　○求めに應ず

規　縱　械　朴　需　伐

材木は、種々の建物、諸造作、諸細工等に用ふるものにして、之を商ふものを材木屋、又材木問屋といふ。其材木となるべき樹木多きが中に、重なるものをいへば、松、杉、檜、槻、樫、桐、栗、胡桃、柿、銀杏（ギンナン）、樅、槭、櫻、朴、黄楊、柳等よりして、材木屋は、丸太、角物、長物、板、桷、貫等の品々に木取りて、客の需めに應ず。大凡、諸材木は、多くは、山林より伐り出せるものなれど、其山林は甚だ育ち遲きものにて、棟梁ともかるべき程の大木となるには、多くは、數十年、數百年を經たるものなり、されば、世に山林を仕立つる人は、餘程遠き見込ある人にて、多くは子孫を思ひ、又ハ廣く後の世の人の爲にすることかるべし。

作文　○新宅に移るを祝はれし文の返事

第十九課　關根矢作山林に熱心かりし話

○かつて　○蠶種　○地味　○約束　○熱心
○所持

關　適　踊　燥　尋　勸　召　賜

關根矢作は、下野國、河内郡の人なり。　かつて思へ―る樣、下野の諸郡、蠶種、生糸かどの産物あるも、唯、我郡のみ、更に他に出ぶべき品かゝ。　されど、地味は、能く、樹木に適ゝたれば、多く、山林を仕立つるの外なゝとて、つひに、志を立て、農業のひまには、樹木を植うることに力を用ひたり、矢作、其時十六歳なりき。　或年の盆にあたり、今若きものと打ち―連れて、踊場にゆのんとするに、あやにくに、かねて

約束ゝれける杉苗を、他より送り來れり。　矢作は、殘念かぎりなけれど、苗の根の燥かんことを恐れ、思ひ切りて、友に別れ、月の光にて、これを植ゑて、其夜を明ゝすことと有りゝとぞ。　かく、山林に、志深―かりゝのば、或人、明治十三年、矢作の七十八歳の時に、尋ねゆきたるに、所持の林、凡八十町歩、杉、檜、樅等の梢、植込の前後により、高きもあり、低きもあり、青々と立ちつゞきたるハ、實に目ざまゝき事なり―

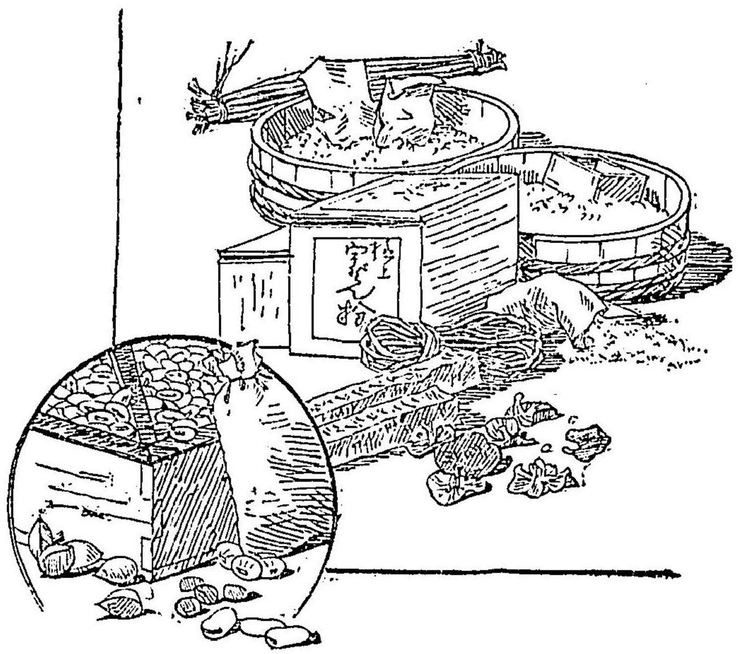
〜といへり。　矢作の、かく熱心なるは、獨、我が爲のみならねば、廣く、各村にも勸め、樹木の仕立方などを教へ〜かば、其名、世に高く、今は誰知らぬものも無きに至れり。　されば、明治十四年、天皇陛下、北海道より御還幸の節、近く召〜出され、褒狀を賜はり〜といふ。

作文　○話の書取

第二十課　穀屋、乾物屋

○大豆　○小豆　○大角豆　○蠶豆　○椎茸　○寒天

穀屋は、穀問屋ともいひて、粳米、糯米、大麥、小麥、蕎麥、粟、黍、稗、蜀黍、玉蜀黍、大豆、小豆、大角豆、蠶豆、豌豆、胡麻、菜種、芥、荏、罌粟、麻子などを商ふものなり。　乾物屋ハ、多く



稗　芥　椎茸　腐　蒟　蒻

は、野菜、果物類の乾きたるもの、又それらより製し、たる品を商ふものにして、其重なるは、椎茸、干瓢、干大根、藻、海苔、氷豆腐、寒天、氷蒟蒻、栗、胡桃、椎實、銀杏、白柿、串柿、索麺、葛粉、片栗粉、蕨粉、生麩、白玉粉、溫飩粉、蕎麥粉等なり。

作文　○暑き頃父の誕生日に人を招く文

第二十一課　青物屋

○大略　○人參　○南瓜　○蓮根　○百合　○馬鈴薯　○甘薯　○若布

○鹿尾菜

青物屋は、又八百屋ともいひて、一切の野菜、果物の生なるを商ふものかり。其大略は、左の如し。

野菜は、大根、蕪、人參、牛蒡、芋、茄子、胡瓜、南瓜、白瓜、芹、三葉、蓮根、くわゐ、百合、枝豆、めうが、ぜうが、竹の子、うど、ふき、わさび、芋、たうがらし、葱、にんにく、芋、水菜、小松菜、ちゆんぎく、はうれんさう、馬鈴薯、甘薯、やまのいも、ちそ、きのこ、あらめ、こんぶ、若布、

鹿尾菜等なり。

果物には、梅、桃、李、杏、梨、栗、柿、林檎、ざくろ、びは、葡萄、橙、九ーぐみ、蓮實、蜜柑、柚子、年母、甜瓜、西瓜、蒟蒻等あり。

而して、其野菜、果物の中には、春夏秋冬、常にたえざるものも有れど、多くハ、

出づる時にさだまりあるものなり。

作文　○小豆

第二十二課　大作の勇氣　一　○童子　○岩瀬　○みなぎる　○高峯　○冬枯　○景色　○畜生　○人間　○隨分

或る山里に、大作といへる、漸く十一歳になれる童ー子ありけり。或る夕方、俄に、客來りて、隣村まで、豆腐を買ひに行きーに、豆腐屋にて、ひまどりけれー

ば、道の中ほどにて、日は暮れかゝりぬ、其道は、右手は、山、左手は、深き谷川にて、岩瀬をみかぎる水音、いとすさまじく、時〳〵も、冬の初めにて、高峯の雪、夕月の光り、冬枯の木の間より見透されて、言はん方無く物すご〳〵。　されど、かゝる景色には、常に慣れたる大作なれバ、何となく打ち歩むほどに、忽ち行く先きの薄暗き木蔭に、二つの光り物見ゆ。　怪みながら、能く見れば、此ハ如何に、大きかる狼なり。

驚きて逃げんとせたれど、一筋道なればすべき樣か〳〵。　こゝにて思へる樣、彼は、畜生にして、我は、人間なり、まゝてや、男兒かり、同じく嚙まれんには、きたなく後を見せんより、むゝろ我より進みて、嚙まるべゝと、覺悟を極め、豆腐を下に置き、有りあふ木の枝を拾ひ取り、眞直に持ち構へて、いざ嚙むからば嚙め、男兒の骨は、隨分、堅きぞとさけびつゝ、ぢり〳〵と進み近づきたり。

作文　○人の誕生日に招かれたる返事

第二十三課　大作の勇氣　二

○あはや　○尻ごみ　○あわて　○ふためき　○眞逆　○臆病

かの狼は、目をいからし、牙を嚙み鳴らして、寄せ來り、あはや嚙みかゝらんとせしが、餘りに、大作が、勇氣強きにや、恐れけん、二足、三足、たじ〳〵と尻ごみせり。　大作は、こゝぞとつけこみ、つか〳〵と詰め寄れば、狼は、あわてふためき、忽ち切岸より眞

○咄　○再　○臆　○珍

逆に、谷川の中に落ち入りたり。　大作は、思はざるに、危き命を拾ひ、胸撫でおろし、ア、畜生といふものゝ、強き樣にても、思の外いくぢ無きものかなと、つぶやきつゝ、再び、豆腐を取り上げて、我家をさして歸りたり。　されど、此事は、誰にも咄さゞりしを、其時、一人の臆病もの、遠き處にかくれ居て見たるが、咄し〳〵にて、人々は、初めて知りたり。　後或る人、何故、かく珍ら〳〵き事を咄さゞり〳〵そと問ひけ

れば、大作、答へて、されればよ、此邊には、狼の出づることは、餘り聞かぬに、餘りに甘く出來過ぎたるゆゑ、たとひ、話にとも、誰にも信ぜらるまじと、おもひけれバなりといひしとぞ。

作文　○豆腐の製法

第二十四課　肴類　一

○生物　○干物　○相物

凡そ、肴類を商ふものに、三種あり。生物を扱ふものを、肴屋、魚店、又は五十物屋といひ、干たる物を扱ふを、干物屋といひ、鹽物を扱ふを、相物屋といふ。生物の類は、時節と土地とによりて、ことなれど、最も通例なるものをいはゞ、鯛、鯉、鮒、かれひ、さば、ます、鮎、すゞき、ぼら、白魚、鯰、どぜう、鰻、あぢ、鰯、あかえひ、あんかう、はうぼう、きす、たら、ぶり、まぐろ、かつを、ふぐ、さめ、鮪、いか、かき、あはび、さゞえ、蛤、ゑゞみ、えび、かに、なまこ、鯨等なり。

鯉　鮒　鮎　鯰　鰻　鰯　蛤

作文　○死去知らせの文

鯉　鮭　鱒　鰤　鱈　鰹　鰕

第二十五課　肴類　二

○干鱈　○鰹節　○干鰕

干物、鹽物の類の通例なるものは、いりこ、きんこ、鰯、鮭、鱒、鹽鰤、干鱈、鰹節、數子、鯡、乾鰕、干鰕、このわた、うに等なり。　生物、鹽物の中、川沼の魚あり、海の魚あり、虫類あり、獸類あり、虫類は、鯛、えび、蟹などにして、獸類は、鯨、是なり。　又廣く世に知られたるは、北海道の鹽物、土佐の鰹節、越後の鮭、琵琶湖の源五郎鮒、伊勢えび、若狹の鯛、肥前の鯨、

沼　蟹　漁　池　湖　抔

三河のこのわた、美濃長柄川の鮎等なり。

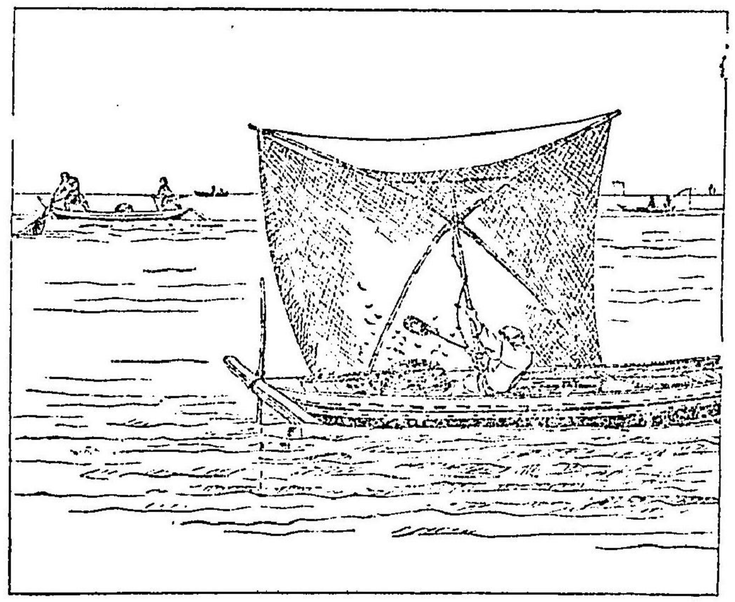
作文　○話の書取

第二十六課　漁業

○家業　○營む　○漁船　○網代　○柴着　○地引網　○投網

れより、魚類を取ることを、漁といひ、これを家業とする人を、漁師といふ。　前に出せる肴類は、皆、此漁師の手より、買ひ込みたるものなり。　漁師は、海、川、池、沼、湖抔の邊に住みて、其業を營むものにて、

て、其漁の仕方により、種々の道具あり。　ろは、漁船、釣道具、銛類、網類、其他網代、柴着、梁等にして、其中、釣道具にハ、釣竿、釣針、延縄、釣糸、浮、沈等あり。　網類には、引網、地引網、指網、四手網、投網等の別ありて、其用處各異なり。



作文　○悔の文

第二十七課　伊豫國網代浦開き初めの話

○漁業　○同志　○開墾　○艱難　○語らひ

伊豫國、南宇和郡、網代浦は、其國内に比ひなく盛なる漁業地なり。　其開け初めを尋ぬるに、昔、土佐の人にて、諸國を廻り歩きたる後に、此處に足を止めしものありしが、其孫なる儀左衛門といへるもの、同志を語らひ、其地を拓かんとて、山の木草などを

燒き拂ひ〜に、俄かに、死に失せければ、同志等は、愚にも、こは、山の神の祟りなるべ〜とて、皆散り散りに立ち去りけり。　然るに、儀左衛門の妻、きぬは、我夫の望の空〜くならんことを悲み、荒野の中の一つ屋に殘り居て、海草を取り、釣を垂れ、又は、隣浦の人に雇はれなど〜つゝ、万藏といへる幼き子を育みて、時の來るを待ち居たり。　かくて、十二年の長き月日を送り、文政四年となりて、万藏も早二十二歳の春をむかへければ、万藏は、再び父の志をおこさんとて、辛く〜て、同志を集め、次第に、開墾を初めたれど、元より、猪鹿多き地なれば、たゝぢ、作物を荒され、中には、堪へかねて、ひそかに逃げ去る者もありけり。　折〜も万藏、ふと〜たる事より、漁業を開く事に、心付き、多くの艱難と、工夫とを積み、て、つひに望を達〜、初めて、一浦を立てたるが、是れ卽ち網代浦なりとぞ。　万藏は、其功により、弘化四

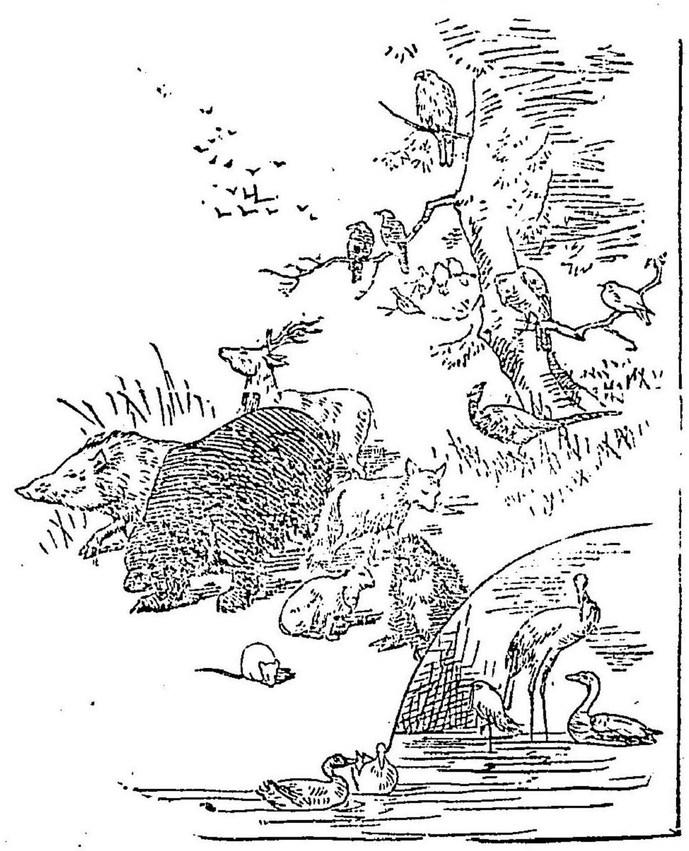
年に、其浦の長となり、あらためて、浦和盛次兵衛と名のりけるが、今は其子の代となり、いよ〳〵繁昌せりといふ。

作文　○釣

第二十八課　鳥獸　○食料　○獵人　○鐵砲　○係蹄

誰も皆、海、川、野、山、池、林かどに、種々の鳥、樣々の獸の、棲めることを知るならん。　鳥、獸の中には、田畑を荒〳〵、其他、種々の害をなすものあれど、其肉

は、人の食料となり、其皮、角、羽、毛などは、種々の道具を造るによきものあり、又其聲の美く〳〵きものあるなり。　鳥類は、通例、雀、烏、鳶、鳩、きじ、鷹、わ〳〵、鷺、鶴、がん、かも、



あひる、うづら、きぎす、雲雀、鶯等にして、獸類は、鹿、さる、猪、熊、きつね、たぬき、犬、猫、兎、鼠、いたち、かうもり、かはうそ、あざらし、らつこ、鯨等なり。是らの鳥獸を取るを、獵といひ、これを業とする人を、獵人といふ。獵の仕方と道具とは、其鳥獸によりて、ことなりと雖も、いづれにも用ふるものは、弓矢鐵砲なり。されど、今は、多く鐵砲を用ひて、弓矢を用ひず。其他、鳥獵には、囮、黏繩、黏網等あり、獸獵に係蹄、穽、銛等あり。

作文　○人の父の病氣を見舞ふ文

第二十九課　飲食店

○肉店　○煑賣店　○煑燒　○料理　○飲食

凡そ、穀物、野菜、魚鳥及、獸類の肉かどを煑燒して料理をなし、人に飲食せしむるを業とするものを、通じて飲食店といふ。其中に、料理店、肉店、煑賣店あり。其他、一種に限るものに、鰻屋、蕎麥屋、鮓

鶩　雉　鷸　鶉　羊　狐　狸

屋かど、あまたあり。　鳥獸の中、重に料理に用ふるものは、鳥類には、雁、鳴、鶩、雉、鳩、鷄、鷸、鶉等にして、獸類には牛、豚、羊、兎、猪、鹿、熊、鯨等なり。

作文　○話の書取

第三十課　皮師

○海豹　○海獺　○滑す　○菖蒲革　○馬具　○三味線　○有名

犬、猫、狐、狸、獺、猪、鹿、猿、熊、海豹、海獺、幷に牛、馬、羊かどの皮類を滑して、種々なる革となすは、皮師の職なり。　皮革の類は、其用、甚だ廣きものにて、從ひて其業は、世に缺く可からざるものなり。

獺　猿　滑　革　菖　緒　鼓

革類には、毛皮、白革、黑桟、赤革、青革、菖蒲革、又種々の模樣、畫などを畫きたるものありて、敷皮、着皮かどにすべきあり、靴皮、下駄緒とすべきあり。　又文庫、革嚢、紙入、巾着、烟草入、其他、馬具類とすべきあり。　三味線、太鼓とすべきあり。　革類の有名なるは、播磨の姫路革、東京の染革等なり。

作文　○類燒見舞の文

第三十一課　旅

○旅人　○旅籠屋　○宿驛　○陸運　○道路　○便利　○駄賃

我家を出でゝ、遠き處へ行くを、旅行、又は旅をするといひ、其旅をする人を、旅人といひ、旅人を宿す家を、旅人宿、或は旅籠屋といふ。又旅人宿の多くあるところを、宿驛といひて、宿驛には、必ず、陸運會社ありて、其道路の荷物を運送することを扱へり。

驛　陸　路　便　蒸

又旅人の便利の爲には、蒸汽車、馬車、人力車、駄賃馬、及海川の船など有り、孰れも缺く可からざるものなり。

作文　○話の書取

第三十二課　獵人の娘

○山腰　○心外　○留守　○本意無げに　○炊ぎて

或る時、老人と年若き娘との二人の旅人、こぼすが如く降り積る雪を蹈み分けく、漸く山腰の一つ

賃　孰　娘　腰

顔　疋　迎　斷　炊　疲　態

屋にたどり着きぬ。　さて、一夜の宿りを頼み入るれは、十二三なる女の子出來り、さも心外なる顔付にて、「それは、いと易い事で有りますが、折惡しく、父が留守にて、れとめ申しかねます。　もか〳〵、今十二三町にて、善い旅籠屋も有りますれば、それまでお出でなされ」といふに、旅人は、いと本意無げに出で往きぬ。　折柄、父は、獵人と見え、一疋の兎を擔ひて、歸れるを、女の子は、出で迎へて、「父様、唯今あなたと同じ程な旅人が、丁度、私位の娘を連れて參り、とめてくれと申されましたが、おるすゆゑ斷りました。ひどい此雪に、さぞ困りませう。　私は、實に、あの旅人と娘とどうかはゆさうでありませぬ」といふ。　父は、「オヽ、お前ぐ、それ程に思ふ

から、今から呼びもどして來ませう」と立ち出でんとするを「イヤ父樣は、お疲れ故、私がまゐります」とて、はやかけ出でぬ。　其内、父は、麥飯かがらも、態々炊ぎて、彼の兎をも料理して、其旅人を連れ歸るを待ち、これをすゝめて、其夜は、睦じく語り明してぞ。　ア、此旅人の親子は、如何ばかり、此女の子の深き情をうれしく思ひけん。

文作　○旅立を知らする文

艦　漕　櫓　楫　帆

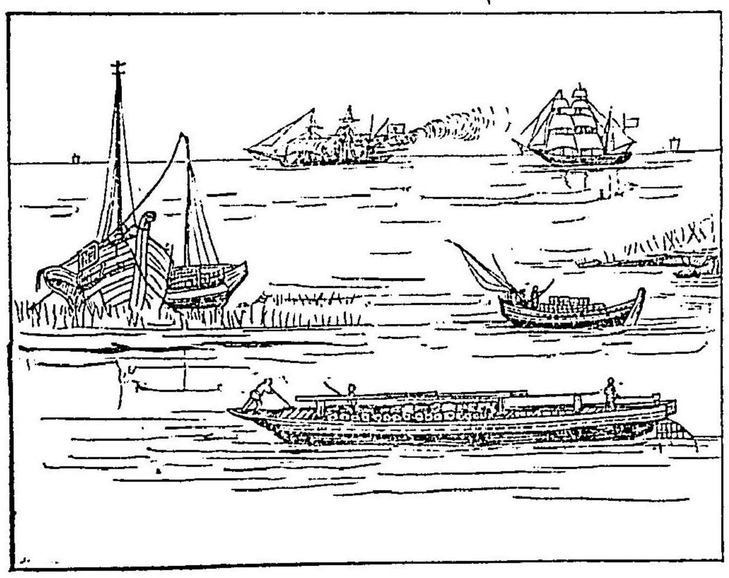
第三十三課　舟

○軍艦　○商船　○飛脚船　○渡船　○はしけ船　○傳馬　○蒸汽船　○帆前船　○船頭　○楫子　○船長　○船將　○水夫

舟には、軍艦、商船、荷船、客船、飛脚船、漁船、渡船、はしけ船等の名あり、其中に鐵にて作れるものと、木にて造れるものと有り。　又これを漕ぐに、小なるものは、多くは櫓、楫、或は竿を用ひ、帆を兼ね用ふといへども、大なるものは、蒸汽の力を借るものあ

汽　但　將

り、蒸汽船、或は汽船といふ是なり。　專ら、風の力によるものあり、帆前船といふ、是かり。　又舟には、常に湖、海をのみ渡るものと、川をのみ漕ぐものとあり。　川船には、高瀬、平田、長船、茶船、傳馬(テンマ)かどの名あり。　又舟を乘り廻はす人を、船頭



智　岬

といひ、船頭の指圖を受けて働くものを、楫子といふ。　但し蒸汽船、帆前船ふどにては、其船頭を、船長、或は船將といひ、楫子をば、水夫といふなり。

作文　○話の書取

第三十四課　智仁勇の水夫　一

○岩角　○乘合　○天運　○櫂藏

いつの頃にか有りけん、荷物、客など、あまた載せたる帆前船、或る岬の沖あひを馳せゆく有りき。

沖　烈　波　累　檣　搖　櫂

折〳〵も烈〳〵き嵐吹き起り、大山の如き波立ち累なりければ、さすがの大船も、搖り上げられ、搖り下げられて、船長、水夫等が必死の働きも、其甲斐あらばこそ、帆はちぎれ、檣は碎け、果てには、一つの岩角につき當り。

れり。船長は、こは仕損じたりと叫びながら、急に乘合の人々に向ひ、かくなる上は、最早、せんかたなし、此上は、天運にまかする外無し、各其用意せられよといひ放てり。一同驚き悲む程ころあれ、忽ち、否々、各方の命は、なほ賴みありと呼はりつゝ、立ち出づるものあり。驚き見れば、權藏と呼びて、年かほ若き水夫なり。さて云ふ樣、我れ今、腰に繩をつけて、岸に達し、之を岩角に結びつくべし、去らば、

各方は、其縄につたはりて、岸に着かる可〜と。

作文　○旅に居る父に家内の無事を知らする文

第三十五課　智仁勇の水夫　二

○趣向　○至極　○微塵　○人力　○逆巻　○苦笑ひ　○警察　○暴風　○難船　○海岸　○慂分　○敬愛

船長は、苦笑ひ〜、其趣向は、至極妙なるら、かの波風を見よ、飛び込むより早く、岩に碎けて、汝の身は、

至妙　警察　視巡　浪介　泳

微塵(ミジン)とならんと。　權藏、我は、元より其覺悟なれど、唯、未だ人力を盡さゞ〜て、早く天運に任かせ、見る見る多くの人を失ふを悲むなりと、いふより早く、逆巻く浪に飛び入りぬ。　かくて、岸の方に、水上警察の人々、俄の暴風ゆゑ、難船もやあらんと、海岸を視巡るに、果〜て此の有樣かれば、急に、救ふ手配を爲す折〜も、岩角に縄を結びつけたるまゝ、倒れ居るものを見つけたり。　直に、介抱すれば、息吹き

返し、かく〳〵ありといふを聞けば、即ちかの權藏あり。　彼を是れする間に、船中の人々、かの繩に傳はり、岸に泳ぎつき、一人も、命を失ひしものなかりしかば、船長は、勿論、乘合の人々より、皆應分の金を出し、厚く權藏に報い、又他の水夫等は、權藏を、智仁勇の水夫とあがめ、深く敬愛をなゝとぞ。

作文　○權藏を智仁勇の水夫といへる所以

第三十六課　警察　○受持　○場處　○火災　○水難　○盜難　○巡査　○警部　○規則　○身命　○人民

凡そ、警察は、市街、田野、山林又は水上かど、其受持の場所を視巡り、火災、水難、盜難、其他、種々なる人民の災難を防ぎもし、救ひもするものあり。　而して、親しく是等の職に當る人は、警部と巡査となり。是等の人々は、常に嚴しき規則を守り、人民の災難

を防ぐ爲には身命を顧みざるものかり。されば、人民たる爲のは、これに報ゆるに、常に敬愛の心を以てせざるべからず。

作文　○試驗及第を遠方の人に知らする文

小學讀本卷之四終

明治二十三年十一月十五日出版
版權所有　文部省總務局圖書課

此書籍ハ賣捌人ノ手ヲ離ルヽトキ何等ノ名義ヲ附スルモ定價ニ超過セル金額ヲ買手ヨリ拂ハシムルコトヲ許サズ

（定價金七錢五厘）

發賣所　東京市京橋區銀座一丁目廿二番地　大日本圖書會社
發賣所　大阪市東區上難波南ノ町七十二番屋敷　同　支社